

水の源

MIZU NO MINAMOTO

Winter
2016

35

集落の 未来へ向けて

ウォークルポ

集落の教科書

～良いことも そうでないことも ちゃんと伝えたい～

京都府南丹市

特集

第10回全国水源の里シンポジウム

～水源の里が創る新しい時代～

京都府綾部市

第8回全国水源の里フォトコンテスト

首長リレー連載

山梨県甲州市

田辺篤市長

長野県木曾町 「木曾ふくしま 雪灯りの散歩路」

2017年2月3・4日開催予定

住民手づくりによる氷のキャンドルが、冬の宿場町をいろどります。
木曾福島駅からゆっくり歩いて1～2時間で散策でき、メイン会場では
地元の甘酒や温かい食べ物などが売店に並びます。

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

柔道から学んだ、技と思いやり 柔道家 山口 香さん



聞き手:「水の源」編集長 町井且昌

柔道から学んだ、 技と思いやり

柔道家

山口 香さん

——全日本選抜柔道体重別選手権大会で10連覇を達成され、第3回世界女子柔道選手権大会では金メダル、そしてソウルオリンピックでは銅メダルを獲得されました。柔道は子どもの頃からされていたか。

はい、6歳の頃にテレビドラマ「姿三四郎」を見て、興味を持つようになりました。軽い気持ちで近所の道場に入出入りするようになったのですが、当時女の子は私一人で、男の子に交じって練習していました。

——「女姿三四郎」と讃えられ、1989年に現役を引退されました。柔道の魅力とは何でしょうか。

柔道は日々練習を積んでいくうちに、あるとき技がうまく決められる瞬間が訪れます。パッと目の前が開けるような感覚です。一瞬で勝負が決まる競技なので、精神面でも鍛えられます。

——日本女子柔道の^{ようらん}揺籃期はどのようなものだったでしょうか。

その^{えんげん}淵源をたどれば嘉納治五郎先生でしょうね。1882年に柔道の総本山である講道館を創られた方ですが、先生は教育者としても尽力されました。「これからの世の中では、女性もどんどん活躍しなければ日本の国はよくならない。そのためには健康な身体作りが第一だ」そう唱えられていたそうです。

次に登場されるのが「柔道の母」といわれる福田敬

子先生。嘉納先生が彼女の祖父である福田八之助先生に柔術を学んだご縁で、福田先生も女子柔道指導者の道へ。東京オリンピック後、53歳のときに渡米され、柔道の国際的普及について輝かしい功績をあげられました。嘉納先生が道を開き、福田先生が道をつないでくださいました。

——柔道から得た教訓はありますか。

柔道というのは相手と組み合った以上、逃げるわけにはいきません。自分を信じて立ち向かわなければなりません。そういう状況は、社会に出ても必ず遭遇します。腹を据えて物事に立ち向かう勇気が必要。柔道はそういう勇気を鍛えてくれると思います。それは男でも女でも同じです。私が「女だてらに」と言われながら学んだものは何か、それは「技」。技というのは自分から仕掛けること、つまり自分を表現するということだと思います。自分の思っていることを相手に伝える。自分を表現することを、私は柔道から学んだような気がします。

私は柔道をやってきて、男性の世界でしたから大変なことが沢山ありました。でもどんな場面でも、言うべきことはちゃんとやってきたつもりです。男性が悪いと言っているわけではありません。でも男性が気付いていないことも少なくありません。それははっきり言って、男女の間にある壁を乗り越えて、理解し合うとい

Profile ^{やまぐち} 山口 ^{かおり} 香さん

1964年生まれ。1984年第3回世界女子柔道選手権大会で、日本女子として初の金メダルを獲得。1988年、ソウルオリンピックでは銅メダル。現在は、筑波大学大学院にて教鞭をとる傍ら、スポーツ全般の普及、発展に努めている。



うことが大切ではないでしょうか。

——パラリンピックも盛んになってきましたね。

そうですね。以前よりもはるかに注目されるようになってきました。ある先生がパラリンピックのチームの指導に行くことになったとき、事前に「障がいをお持ちの方に言うてはならないことはありますか？」と聞いたそうです。役員はこう答えました。「何を言っただけでも結構です。一つだけ先生のお考えを改めていただければ。先生は障がいを持っているとおっしゃいましたよね。私たちは、障がいは『持っているもの』ではなくて、障がいが『ある』と理解しています。先生は手話がお出来になりますか。出来ない方が多いと思います。でも手話ができれば、障がいの1つがなくなると思われませんか」。つまり障がいは持っているものじゃなくて二人の間にあるものなんです。どちらかが歩み寄ることができれば、その障がいは乗り越えることができるのです。多くの水源の里で課題となっている高齢化の問題も同じだと思います。もちろん、ハード面の整備は大事です。でもそこに手を差し伸べるこ

と、ソフト面の認識を変えることによって、障がいと感じなくなるのではないのでしょうか。いつも相手の心に寄り添うことが社会生活の基本だと思います。



現役時代の山口香さん（1988年ソウルオリンピック）



集落の教科書

～良いことも
そうでないことも
ちゃんと伝えたい～

京都府 南丹市

【取材・文：竹市 直彦】

旅愁豊かな茅葺屋根の古民家が群集し、屋根の独特な勾配が周辺の山々と美しい調和を見せる京都府南丹市美山町、北集落。年間20万人を超える観光客が訪れる人気スポットである一方で、過疎高齢化という中山間地域共通の問題を抱える。北集落が抱える課題について知るべく、南丹市企画政策部地域振興課の中野修さんに案内していただいた。

美しい茅葺屋根の家々が残る



美しい景観を守るための集落のルール

「かやぶきの里」として知られる北集落にある約50棟のうち38棟が茅葺で、その大半は江戸時代に建築された入母屋造り、周囲に下屋を巡らし、棟をほぼ東西にそろえて建てられている。集落全体が緩やかな傾斜地に広がっており、家々の敷地に積み上げられた石垣と、その間を縫うように流れる水路の織りなす光景が、どこか遠く懐かしい記憶をくすぐる。こうした美しい風景を維持していくために、ここに暮らす人々はどんな努力を重ねているのか疑問を抱き、中野さんに尋ねてみた。

「まずは、集落の全員が参加して行う日役があります。4月には荒溝（ひやく）といって水路の泥上げ作業があります。そして、5月、7月、9月には集落の草刈りをします。これとは別に、公民館の男性役員や農事組合の役員たちによる役員日役もあります。このほか農業用道路の補修（みちおしん）などを行う道普請を4月に実施。皆で行う日役ではカバーできない作業をフォローします」。

何やら、独特な用語やルールが多そうだ。

「全員参加の作業としては、もうひとつ、茅日役（かひやく）があります。茅葺

屋根の維持に不可欠な茅を確保するために、茅葺家屋に住んでいない人も含め、集落全員が参加対象です」。具体的な作業としては茅場の管理と茅の刈り取りで、5月と8～9月の2回、1～2日間かけて、茅場の雑草やツルを刈り取る。11月末～12月中旬に、7～10日間かけて茅刈りと茅立てを行い、翌年4月初旬に乾いた茅を収納する。

「日役がたいてい日曜日に行われるのに対して、茅日役は他の行事と重ならないよう平日に設定されます。加えて、雨天時を避けて行うため日程が急きょ変更になることも多く、集落外に勤める人にとっては参加しづらいのが現状です」。

聞けば、日役は「自分たちのことは自分たちでやろう」という自治活動のため無償だが、茅日役は時給として700円が支給されるとのこと。やはり、日本有数の景観が維持されている裏にはさまざまな課題があり、それらを解決するために独自の工夫やルールがあるようだ。

暗黙のルールを明文化した教科書

お話を伺ううちに、新たな疑問が生まれてきた。美しい景観を守るため、自分たちの集落のためと



美しい水路のある光景にふと足をとめる

は言え、こうしたルールを皆が受け入れているのだろうか。不満や反発は出ないのだろうか。さらには、移住者はどう受け止めているのだろうか。

「北集落は、平成5年に、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されましたが、そこに至るまでに長年議論を深めてきました。多い年には年200回におよぶ会議を開き、全国でも例を見ない住民100パーセント合意で国に申請しました」。

連日あかりが灯り、議論で白熱する公民館は「不夜城」とも呼ばれたらしい。そうした経緯もあってか、今も住民の集落に対する当事者意識は高く、後継者問題、空き家問題、観光客の受け入れ体制、観光客の増加対策など集落内のさまざまな課題に対して真剣に考え、皆で話し合う気運が醸成されているようだ。日役や茅日役のルールも皆が納得しており、もしも不具合が生じたらその都度話しあって解決していくのだろう。

「移住者については、移住前に集落の仕組みやしきたりを説明させてもらい、理解していただいたうえで入ってもらおうようにしています」と言いながら、中野さんは



茅葺を手入れする風景が日常的に見られる



特定非営利活動法人テダスの事務局長、田畑昇悟さん



南丹市企画政策部地域振興課の中野修さん

一冊の冊子を見せてくれた。『集落の教科書』という表題の下には「良いことも そうでないこともちゃんと伝えたい」のキャッチコピーが続く。中を開くとびっくり。財産区委員、公民館役員、農事組合、北区役員、北村かやぶきの里保存会…といった多種多様な組織と、その相関関係を示した図があったり、「区長、組長の決め方」「組み割りと区費」といった仕組みが明記されていたり、移住後のあいさつ回りについての順番、菓子折りをもっていくほうがよい、直近の総会でお披露目を兼ねてあいさつする……、あるいはご祝儀やお香典の渡し方や金額、お返しの仕方など、「取って口にはしないけれど、住民なら誰もが知っていて当然な暗黙のルール、慣習」が、具体的な数字や言葉でまとめられている。

さらに、それぞれのルールや慣習について「強いルール」「ゆるいルール」「消えつつあるルール」「慣例や風習」の4段階に分類して表示、そのルールをどの程度守ったらよいかの目安にできる仕掛けがほどこされている。よくもまあ、ここまで文章化できたものだと、驚きを隠せないでいる筆者の表情を見て取った中野さんは「よくできているでしょ。実は、この教科書にはお手本があるんですよ」と明かしてくれた。

良い所自慢のガイドブックを離れよう

中野さんの案内で訪れたのは、美山町から車で60分ほど走った街中にある「南丹市まちづくりデザインセンター」。ここは、南丹市を中心に活動するNPOやボランティア団体などを総合的に支援するとともに、地域課題の解決や地域活性化を図るための拠点施設で、特定非営利活動法人テダスが南丹市からの委託事業として運営している。

テダスの事務局長、田畑昇悟さんが取材に応じてくれた。

「『集落の教科書』のことですね。あれは、南丹市日吉町の世木地域から“移住者向けに地域を紹介するガイドブックを作成してほしい”との依頼を受けて、“それだったら、いい所自慢ではなくて、そうでない所もすべて紹介する本を作ったらどうですか”と提案したことからスタートした企画なんです」。良い所ばかりを強調した本を作っても、



今までに作成された『集落の教科書』日吉町世木地域（左）と美山町北村（右）



「ルールには濃さがある」のページでは、4つの分類が紹介されている

それを手にして憧ればかりで移住した人は、そこに暮らすうちに悪い所を知り、いずれ落胆のほうが大きくなってしまわないか。そのような mismatches を防ぐためにも、すべてを紹介するツールが必要ではないかと提案したのだ。この提案に対して、依頼者である世木地域振興会からは当初、「そんな紹介の仕方をしたら、地域のマイナスイメージにつながって、移住希望者が減ってしまうのではないか」と難色を示されたという。しかし、時間をかけて説明をしたところ、趣旨を理解してもらうことができて、「良いことも そうでないことも ちゃんと伝える定住促進ツール 集落の教科書」が誕生した。

「良いことも そうでないことも」と口で言うのは簡単だが、実際に作成するとなると膨大な作業が待ち受けていた。まずは3か月間、

日役については「強いルール」として、作業内容が明記されている

世木地域を回り、出会う人出会う人を捕まえては話を聞く。昼だったり夜だったり、平日だったり休日だったり、時間帯や条件を変えながらできる限り多くの人から話を聞いた。同じ慣習についての説明が、話す人によって異なる内容であることも少なくなく、検証する時間もずいぶん費やした。

「試行錯誤、手探りの連続の中で完成したのが、『集落の教科書』第一号となる、日吉町世木地域版です。この本が出てしばらくして、中野さんから“美山町北村版を作成してもらえないだろうか”との連絡をいただいたのです」。

実は、南丹市企画政策部地域振興課の職員である中野さんは、美

最後のページに記載された、住民へのメッセージ

山町北集落の住民でもあり、田畑さんに話を持ち掛けた平成27年度は北集落の区長を務めていた。他の中山間地域の集落と同様、少子高齢化、過疎化、空き家問題といった課題

解決のため、何かよい方策はないものかとアンテナを張っていた矢先、目に留まったのが『集落の教科書』だった。

「良いことも そうでないこと

も ちゃんと伝える」というコンセプトに、最初は戸惑いを覚える人が多いのも確かです。しかし、これまでは“郷に入っては郷に従え”や“何となく暗黙の了解”で通ってきたことが、必ずしも通用しなくなるケースも出てくるでしょう。また、うまく機能しなくなった慣習について皆で話し合う必要性も出てくるでしょう。『集落の教科書』として慣習やルールを明文化することは、自分たちの暮らしを見つめなおす意味でも、大いに役立つと思います」と、編集作業を振り返りながら語る中野さん。似たような課題を抱え、移住者誘致に取り組む集落にとって、これまで誰も目を向けなかったデリケートな部分に取って取り組む『集落の教科書』は必須アイテムになるかもしれない。



火に弱い茅葺屋根の建物を守るため、住居ごとに放水銃が設置されている（日頃は収納箱に収められている）。村内では、焚火、花火、歩きタバコが禁止であり、教科書にも明記されている

人口約32,700人、面積616.4km²。京都府のほぼ中央部に位置し、大半を丹波山地が占めている。北部を由良川が、中・南部を淀川水系の桂川（大堰川の別名を持つ）が流れ、南部は亀岡盆地につながる。「音風景百選」に選ばれた、るり溪、芦生原生林など、貴重な自然環境を有する。市のキャッチフレーズは「森・里・街がきらめくふるさと」。

『集落の教科書』について、現在、美山町宮島地区版を作成中。日吉町世木地域版と、美山町北村版は、南丹市のホームページよりダウンロードいただけます。ぜひ、ご覧ください。
<http://www.nancla.jp/kurashi04/>

特集

第10回 全国水源の里シンポジウム

水源の里が創る 新しい時代

【取材・文：白波瀬聡美】



開会のあいさつをする山崎善也綾部市長

綾部市が全国に先駆け「水源の里条例」を制定し、活性化の取り組みを始めて今年で10年目を迎えました。この記念すべき年に、全国各地から約900人が集い「全国水源の里シンポジウム」を開催。「水源の里」発祥の地で、これまでの10年間の取り組みを振り返るとともに、これからの10年に向けての課題や方向性について議論しました。水源の里の歩みとともに、第10回大会の様態をレポートします。



会場には全国から約900人が訪れた



特別表彰を受ける綾部市水源の里連絡協議会
会長、酒井聖義さん

限界集落から水源の里へ

10年前は廃村寸前。誰もが「もう遅い」「もう無理や」とあきらめかけていた。過疎高齢化が進み、集落の存続自体が危ぶまれる地域は「限界集落」と称され、全国的にも消滅危機がささやかれる。そんな中、一歩前へ踏み出したのは、人里離れた山奥に暮らす住民たちの「おらが村を絶対に消滅させまい」という強い思いだった。

その思いを後押しすべく、綾部市は平成18年に「水源の里条例」を制定。マイナスイメージの強い「限界集落」という呼称をやめ、由良川源流近くの地域への愛着と将来への希望を込めて「水源の里」と名付けた。基本理念は「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。疲弊する中山間地域の課題を、都市住民にも理解と協力を求める趣旨とし、その再生策を全国初の条例化によって打ち出した。それはまさに、官民一体となって集落の消滅危機に立ち向かう決意表明だった。

住民の声をもとに集落ごとの課題を把握し、それに対する具体的な解決策に取り組む。市営住宅の

新設や携帯電話の利用圏外解消、インターネット用の光ファイバー網整備などの生活基盤を充実させるハード面の支援とともに、地域資源を活用した特産品の開発・商品化、都市部から人を呼び込む農業体験、伝統芸能の復活・継承など、ソフト事業にも注力した。

身の丈にあった地道な取り組みは、同じ悩みを抱える自治体の中

心に共感を呼び、平成19年には「全国水源の里連絡協議会」が発足。現在では170の市町村が参画し、各地から視察訪問や多くのマスコミからも注目を集めるなど、確かな国民運動へと発展を遂げた。

違いのわかる感性を磨け

「全国水源の里シンポジウム」は、平成19年綾部市のイニシアチブで開催した第1回以降、協議会に参画する自治体を会場に毎年続けられ、地域活力が低下した集落の維持・再生について考えてきた。10回目となる今回のテーマは「水源の里が創る新しい時代」。開会式典では、山崎善也綾部市長が「今一度、原点に戻って、水源の里の魅力と連携の必要性を確認し合い、次の世代につなげるための記念日となることを期待している」とあいさつ。続く特別表彰と全国水源の里フォトコンテスト表彰式の後、東京大学名誉教授の養老孟司さんが「今を幸せに生きる～これからの地域の在り方」を演題に基調講演を行った。

養老さんは、現代社会が都市化、



基調講演する養老孟司さん



実践報告を行う老富の西田さん（左）と古屋の渡邊さん（右）

過疎と向き合ってきた10年

水源の里の10年間の歩みを紹介するビデオ上映に続く実践報告では、水源の里発足当初から精力的に集落振興に取り組んできた「水源の里 老富^{おいとみ}」代表の西田昌一さんと「水源の里 古屋^{こや}」代表の渡邊和重さんが登壇し、それぞれ発表を行った。西田さんは、廃村の危機に直面し諦めムードが漂う中、水源の里条例で集落に一筋の光が差したという。「今がチャンスだ、やろうやないか」と一気に気運が高まり、特産品の開発・販売や都市農村交流を中心に取り組んできた。今では、「住民に目標ができて地域全体が活気づき、笑顔と笑い声が山間に響き渡っている。これからも明るく元気に無理をせず、長く活動を続けることを約束したい」と語った。渡邊さんは、自身が東京から戻った12年前は、まさに「山が泣いている、川が泣いている」という状態の寂しい集落だったという。しかしやはり「私たちの代で廃村にしたいくない」という思いから、地元・行政・ボランティアが三位一体となり活動してきた。「今

グローバル化という名のもと、どんどん「同じ」方向へ向かって動いていることに警鐘を鳴らす。人は同じ方向へ向かうことで安心し、平らに慣らされた社会が、経済的で合理的な素晴らしい世界であるかのように錯覚している。しかし、同じというのは、頭の中、意識の中でとらえたものであって、実際には具体的に「同じもの」は世界中どこを探してもない。あるとしたら、それは劣化しないコピーやデジタル、コンピュータの世界。しかし、人間の細胞は日々変化し、7年経つと完全に入れ替わるとさえいわれている。昨日と同じ人間など存在しないのだ。普遍的な0と1のアルゴリズムで作られた情報社会は、現実的で効率的かも知れないが、コンピュータでも置き換えることができる世界に過ぎない。

だからこそ今、「人間が何をやるか」が問われているのだという。そのうえで、「違いがわからないと地域の未来はない」と語る。地域の最大の問題は、頭の中の価値観が都会化しているということ。地域として存続していくには、他のどことも同じではダメで、まず住民が「違いのわかる感性を磨くこと」が大切だと強調する。

「人間らしく本気で生きること」、それは容易なようで難しい。養老

さんは自身の解剖学研究に実験用のラットは使わず、野生のネズミにこだわった。それは、実験室で本能を忘れたラットは、ネズミという生き物ではないと感じたからだという。「自分の感性にこだわらないと人生はおもしろくない。ラットを使つてうまくやれば、もしかしたらノーベル賞をもらえたかも知れない。ただ、僕は人生楽しかった」と笑う養老さんの言葉が印象深く心に残る。ノーベル賞が絶対的に素晴らしいという偶像的な意識こそまさに、「同じ」を求める現代人の危うい感性なのかも知れない。



パネルディスカッションの様子

の発展があるのは多くの協力者のおかげ。一人じゃない、社会に必要とされている、気にかけてくれる人がいると感ずることで集落はまだまだ頑張れる」と語った。それぞれの取り組みは徐々に実を結び、古屋には枳の木の収穫作業や獣害対策などに年間700人近くのボランティア（交流人口は3千人）が訪れ、老富などが作る特産品のとち餅は年間約1万5千個を出荷するまでとなった。

その後のパネルディスカッションでは、四條畷学園大学の嘉田良平教授をコーディネーターに、島根県中山間地域研究センターの藤山浩さん、フリーアナウンサーの小谷あゆみさん、山崎市長の3名により「水源の里のこれからの10年をどうデザインするか」などについて、活発な意見交換が行われた。藤山さんは「地元の作り直しのポイントは、1%の消費を地元で作りきれればいいということに住民が気付くこと。どれだけ頑張ればいいのか分かれれば、地域は頑張れるし、それだけで循環型社会も作れる。そして、日々の暮らしを大切にすること。地域がよくなるには、自分だけ、今だけ、お金だけ、じゃない人が必要だ」。小谷さんは「現代は一億総メディアの時代。水源の里の活動支援はボランティアだけでは限界がある。若者がSNS



次回開催地の滋賀県米原市の平尾市長と握手を交わす山崎市長

で発信したくなるような自分が輝けるツーリズムにもっていくことがキーになるのではないか」。山崎市長は「今の田園回帰の動きは本物だと感じる。これまでやってきたことは間違いなかった。今後は、親や祖父母世代にも、子ども達に胸を張って、故郷に帰って来い、と言えるふるさと教育を浸透させるとともに、他と差別化を図った定住促進施策に取り組んでいきたい」と語った。会場からも活発な意見が出され、「新しい時代を水源の里から創り出す」というテーマ

に相応しい、熱のこもった討論会となった。

特色あふれる地域おこしを見学

シンポジウムの翌日は市内6コースで現地視察が行われ、約100人が参加。水源の里探求コースの橋上^{はしかみ}・市志^{いちし}には20人が訪れた。18戸44人が暮らす橋上では、ほぼ全世帯できゅうりを栽培。苗から無農薬で育てた漬物専用品種「シャキット」で作られる「きゅうり漬」の製造



第8回全国水源の里フォトコンテスト入賞作品の展示



会場での特産品販売も好評を集めた



水源の里で創作活動を行う作家たちの作品展示



橋上でのきゅうり漬作り視察

販売が町おこしの中心だ。視察では、代表の佐々木幸雄さんの解説のもと、きゅうり漬の製造見学が行われた。試食した参加者は「歯ごたえが良く、懐かしい味。美味しい！」とお土産に購入する姿も見られた。

続いての訪問地は、8戸15人が暮らす市志。ここの中心事業は、集落に広がる2万5千㎡の「ふき畑」を活用した「ふきオーナー制度」。現在13区画の圃場を年間5千円で、滋賀や亀岡など11人のオーナーに貸し出し、栽培や収穫の指導をし

ながら交流を深めている。ふき畑を訪れた参加者からは「実践者の皆さんの熱心な姿勢に感動した」などの感想が聞かれた他、様々なノウハウを吸収して帰ろうと意欲的な質問が飛び交い、篤実な交流がなされた。市志活性化事業会長の阪田薫さんは「課題は後継者不足だが、今後も「交流」をキーワードに体験型交流事業に力を入れ、まずは集落に来てもらってこの地域の良さを知ってもらいたい」と話す。市志では、来年4月に大阪からのIターン夫妻を迎える予定。若

いエネルギーで集落に笑顔ほころぶ春を住民全員が心待ちにしている。

今回のシンポジウムを機に、改めて水源の里を支える人々の心が一つとなり、次の10年に向けて新たな一歩を踏み出した。「今が一番幸せ」「10年前より若返った」と語る集落の守り人たち。日々の小さな幸せの積み重ねが、水源の里の未来をこれからも輝かせる。



市志でのフキ畑の現地視察

出会う、集って、つながって 日本の元氣はふるさとから

列島ふるさと再生 全国フォーラム2017

見えてきた都市と農山漁村の
連携と対流

2017年2月18日(土)～19日(日)

国立オリンピック記念青少年総合センター

東京都渋谷区代々木神園町3-1
小田急線「参宮橋駅」下車徒歩5分



1960年代から顕著に見られた人口の流動化、都市化現象の進展、とりわけ東京一極集中の現象により、日本列島は過疎過密という大きな歪みを招くことになりました。このような偏った日本列島のあり方を改善するため、ふるさとの再生について意見交換しようと、「列島ふるさと再生全国フォーラム」を開催します。このフォーラムを通じて、地域と人、都市と農山漁村[※]を結ぶ活動の輪がいつそう広がることを期待しています。

※農村、山村、漁村の総称。農業や漁業などの第一産業が主力の地域。

- 主なプログラム
- 基調講演 結城 登美雄氏 (民俗研究家)
 - 政策提言シンポジウム「私が考えるふるさと再生」
 - テーマ別分科会・ワークショップ
 - 若者によるふるさと自慢 ほか

参加要領

定 員 — 500名
 参加費用 — 3,000円 学生・生徒：1,500円 資料代含む(参加費用は参加日数にかかわらず一律です)
 募集締切 — 2017年1月27日(金)
 お問い合わせ — 列島ふるさと再生全国実行委員会事務局
 〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-23-6 秀和虎ノ門三丁目ビル4階(日本青年団協議会気付)
 TEL ▶ (03) 6452-9025 FAX ▶ (03) 6452-9026
 EMAIL ▶ retto_saisei@dan.or.jp URL ▶ http://www.dan.or.jp/retto/

地域振興に
関心のある人たち、
集合！

異世代間交流、
異業種交流に
関心のある人たち、
集合！

主催 — 列島ふるさと再生全国実行委員会
日本青年団協議会
 後援 — 外務省 農林水産省
 全国知事会 全国市長会 全国町村会
 全国都道府県議会議長会
 全国市議会議長会 全国町村議会議長会
 (一財)日本青年団
 (公社)日本青年会議所
 全国地方新聞連合会
 (株)時事通信社
 (一社)共同通信社
 日本経済新聞社

列島ふるさと再生全国実行委員会構成団体：全国水産の里連絡協議会、(公財)日本農業センター、自治体農産物研究所、(NPO)地球緑化センター、(特定NPO)JUN(若者)NETWORK、日本都市青年会議、日本青年団協議会



山梨県甲州市
田辺 篤 市長

自然の恩恵

大都市生活を支える多摩川

甲州市塩山にある笠取山。その南懐に所在する、多摩川の源流点である水干。ここから「最初の一滴」がしたたり落ち、全長約130kmの道のりを経て東京湾へと流れていきます。多摩川の歴史を紐解くと、江戸時代までさかのぼります。江戸幕府が開かれ参勤交代が始まると、江戸町の人口は増加し、町の急激な発展とともに飲料水不足が課題となりました。このため江戸幕府は、飲料水確保のため多摩川に水源を求めることになり、水路建設を行なったことが始まりとされています。現在では、東京都の水道水源の約20パーセントを多摩川が占め、利根川・荒川水系と共に、都市の発展と生活を支える重要な役割を果たしています。

豊かな自然と果樹園交流のまち

甲州市北東部に位置する大菩薩山系や秩父山系の山々は、秩父多摩甲斐国立公園に指定されており、森林地域をはじめ清らかな水の流れる溪谷や河川など、豊かな自然を育んでいます。また、地域を流れる富士川水系の笛吹川や重川、

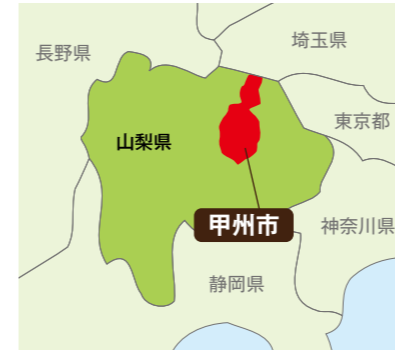
大菩薩山系から流れる一ノ瀬溪谷や日川溪谷などが複合扇状地をつくり、なだらかな斜面に広がるブドウやモモなどの果樹園は、四季折々の景観を形成しています。

本市の主要産業は、果樹栽培を中心とした農業ですが、人口減少や若者の流出による農業従事者の減少、高齢化などにより、近い将来、衰退していくことが危惧されます。そのため、担い手の確保と後継者の育成に力を入れており、援農制度である「農村ワーキングホリデー」、新規就農者へ支援を行う「就農定着推進事業」、農業の継承を図る「親元就農支援補助金交付事業」などを実施する中で、市の主要産業である農業の振興を図っています。

自然資源を活用した観光振興

前述した大菩薩山系は、首都圏から好立地にあることから、登山シーズンには多くの登山愛好家の方に訪れていただいています。

更なる誘客と啓発を図るため、地元観光協会や民間団体では、自主的に登山イベントを開催。また、一部の地域では、大菩薩山系の一部を「甲州アルプス」の愛称とす



るなど、山岳観光を推進する動きも活発化しつつあるところです。

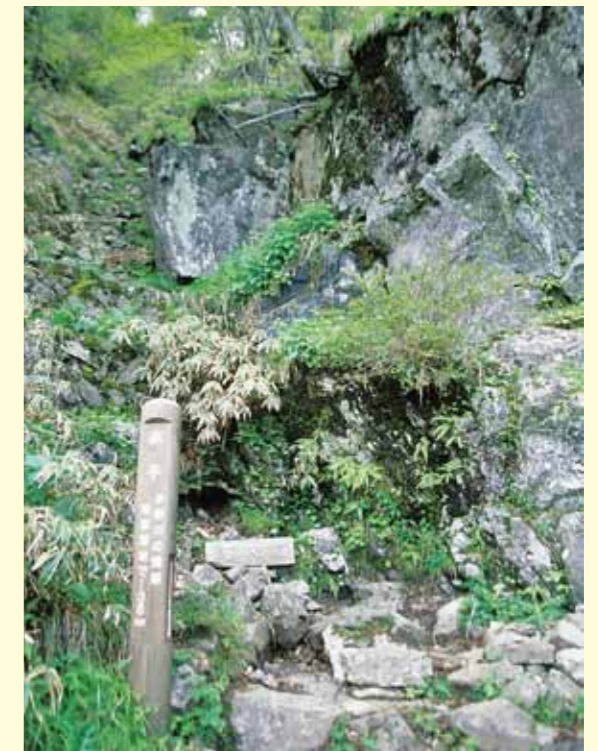
さらには、鹿による高山植物への被害も顕著であることから、市や観光協会が主体となって防護柵を設置して管理を行うなど、環境保全にも努めております。それに加え、本市で活動していた地域おこし協力隊のOBが鹿肉を使ったペットフードの加工事業をはじめなど、ジビエを地域資源と捉えて活用する意識も醸成されつつあり、官民連携のもと、地域が一体となって自然資源の有効活用を模索しているところです。

自然環境を守り継承することが使命

結びに、雄大な自然の産物である果樹、清らかな水、空気。我々がこうして生活していただけるのも、山や森林の涵養機能が働き、川をつくり、田畑に水分を与えるからだと思います。自然から恩恵を受けていることを自覚し、これまで受け継いできた自然環境を守り、後世に継承していくことは、水源の地に住む我々の使命の一つであると考えます。



紅葉に染まる日川溪谷竜門峡



多摩川源流点「水干」



初夏の勝沼ぶどう郷。ぶどう棚が扇状地に広がる
真剣な眼差しのワーキングホリデー参加者

全国水源の里 フォトコンテスト

水源の里の魅力を表現した作品、441点が集まる

協議会参画市町村で撮影された、水源の里らしい生活や文化、四季折々の表情などを収めた作品を募集する、全国水源の里フォトコンテスト。今回は441点の応募がありました。8月末に審査会を行い、グランプリ（1点）、各大臣賞（3点）、特選（10点）を決定しました。

審査員

たぬまたけよし 田沼武能（一般社団法人日本写真著作権協会会長） / わしだきよかず 鷺田清一（哲学者、京都市立芸術大学学長）



『蒼い刻』 撮影地：長野県王滝村 辰巳 功さん（東京都足立区）

【講評・田沼】 水源の里の幻想的な風景を写し出しています。撮影者は湖に立ち枯れた白い林を見て、それをどういう風に撮影するか考えられました。手前からLEDライトで照らされ、その光が少し入ることで、ブルーを基調とした幻想的な作品に創りあげられています。たいへん素晴らしい作品だと審査員のふたりが感動して、グランプリに推薦させていただきました。
良い写真を撮るにはその場所を勉強する必要があります。魂が入っている写真とそうではない写真というのは、一目瞭然です。撮影者が被写体に出会い、感動して撮った写真には、感動が写し出されています。見る人はそれを感じて感動するのです。

過去の入賞作品は協議会HPよりご覧ください。
<http://www.suigenosato.com/contest.htm>

※長年審査委員長を務めていただいた、公益社団法人日本写真家協会会員・井上隆雄さんは7月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



特選 『余呉湖の春』 撮影地：滋賀県長浜市 堅山勝英さん（大阪府大東市）



特選 『散居集落の朝』 撮影地：山形県飯豊町 斎藤 徹さん（山形県飯豊町）



『溪谷へダイブ』 撮影地：群馬県みなかみ町 町田 柁雄さん（埼玉県美里町）

【講評・田沼】 撮り方が非常に上手です。飛び降りてきた女性が、ロープの先で手を広げています。それがちょうど、木の光が当たっていない部分になっているため、女性が浮き出ている。その下に大きな岩があることも、恐ろしそうな雰囲気を出しています。バンジージャンプが水源の里で行われているのですね。観光で行って親しむことも、水源の里の普及につながるのではないかと思います。



特選 『川面のシンフォニー』 撮影地：京都府南丹市 武中三喜さん（京都府福知山市）



特選 『結氷湖の目覚め』 撮影地：福島県北塩原村 鈴木彦三さん（福島県福島市）



『帰って来た鮭』

撮影地:京都府福知山市

白木勇治さん(京都府福知山市)

【講評・田沼】 放流した鮭が、由良川に帰って来て捕えられたところ。下から網がななめの線が入っており、目玉の鮭が中央にあって、それを持っている誇らしげな顔をした漁師さんの顔が素晴らしくクローズアップされています。農林水産大臣賞にふさわしい一枚ではないでしょうか。



特選 『ふるさとの森』 撮影地:京都府綾部市
鈴木 隆さん(京都府綾部市)



特選 『コイの季節』 撮影地:愛媛県西予市
白石信夫さん(愛媛県宇和島市)



特選 『清流の恵』 撮影地:京都府綾部市
田中作子さん(京都府南丹市)



特選 『盂蘭盆』 撮影地:高知県大豊町
松本宣博さん(高知県南国市)



『清流に遊ぶ』 撮影地:岡山県真庭市 河口 毅さん(岡山県岡山市)



【講評・田沼】 水と遊んでいる子どもたちの躍動ぶりが素晴らしい作品です。後ろから流れている水しぶきが画面全体に広がっていて、ダイナミックな自然を感じることができます。子どもたちが自然に親しんでいる印象が強く出ており、背景の青空も自然との対話に素晴らしいわき役となっています。



特選 『夏だGO』 撮影地:岩手県遠野市
菊池 茂さん(岩手県遠野市)



特選 『ゴール目指して』 撮影地:京都府福知山市
野口昭一さん(京都府福知山市)

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡先は **全国水源の里連絡協議会 水の源編集委員会**
綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL:0773-42-4271 FAX:0773-54-0096 E-mail:suigen@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ 『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円(送料込)
お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから

上流は下流を思い、 下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、過疎・高齢化の進行により消滅の危機に直面している集落を「水源の里」と呼んでいます。全国170の市町村が連携し、集落再生に向けて活動しています。



- 北海道**
 新十津川町
 下川町
 美深町
 中川町
 清里町
 豊浦町

- 青森県**
 西目屋村

- 岩手県**
 遠野市
 一関市
 葛巻町
 西和賀町

- 宮城県**
 七ヶ宿町
 富谷市

- 秋田県**
 東成瀬村

- 山形県**
 小国町
 飯豊町

- 福島県**
 喜多方市
 相馬市
 下郷町
 南会津町
 北塩原村
 西会津町
 磐梯町
 猪苗代町
 柳津町
 金山町
 昭和村
 矢祭町
 川内村

- 栃木県**
 日光市

- 群馬県**
 上野村
 南牧村
 みなかみ町

- 東京都**
 檜原村
 奥多摩町

- 新潟県**
 長岡市
 津南町
 関川村

- 福井県**
 おおい町

- 山梨県**
 山梨市
 笛吹市
 上野原市
 甲州市
 早川町
 身延町
 道志村
 小菅村
 丹波山村

- 三重県**
 津市
 熊野市
 大台町
 大紀町

- 滋賀県**
 長浜市
 高島市
 米原市

- 京都府**
 京都市
 福知山市
 舞鶴市
 綾部市
 宮津市
 京丹後市
 南丹市
 京丹波町
 与謝野町

- 兵庫県**
 丹波市
 多可町
 神河町

- 奈良県**
 天川村
 川上村

- 和歌山県**
 田辺市
 有田川町
 日高川町
 すさみ町
 古座川町

- 鳥取県**
 若桜町
 日野町

- 島根県**
 松江市
 浜田市
 出雲市
 益田市
 大田市
 安来市
 江津市
 雲南市
 奥出雲町
 飯南町
 川本町
 美郷町
 邑南町
 津和野町
 吉賀町
 海士町
 西ノ島町
 知夫村
 隠岐の島町

- 岡山県**
 真庭市
 里庄町
 鏡野町

- 広島県**
 庄原市
 神石高原町

- 徳島県**
 安田町
 北川村
 馬路村
 芸西村
 芸北町
 本郷町
 大豊町
 土佐町
 大川村
 いの町
 仁淀川町
 中土佐町
 佐川町
 越知町
 梶原町
 日高村
 津野町
 四万十町
 大月町
 三原村
 黒潮町

- 香川県**
 まんのう町

- 愛媛県**
 西予市
 久万高原町

- 高知県**
 東洋町
 奈半利町
 田野町

- 宮崎県**
 延岡市
 綾町
 木城町
 諸塚村
 日之影町

- 鹿児島県**
 日置市
 伊佐市

- 佐賀県**
 佐賀市
 多久市
 嬉野市

- 熊本県**
 阿蘇市

- 大分県**
 大分市
 佐伯市
 臼杵市

私たちは水源の里を応援します!!

- 全国環境整備事業協同組合連合会
- 一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
- 全国森林組合連合会
- 全国農業協同組合連合会

- 電気事業連合会
- 独立行政法人 水資源機構
- 公益社団法人 大分県薬剤師会